

小中英語科の接続の分析を活かした中学校英語の高度化について

—主体的に学習に取り組む態度に焦点を当てて—

松本 志津子・染谷 藤重

On Upgrading Secondary School English,
Utilizing the Analysis of Connections in the Elementary and Middle School English Departments
Focusing on the Development of a Positive Learning Attitude Education

Shizuko MATSUMOTO, Fujishige SOMEYA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第3号 (2021年1月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.3 (January 2021)

小中英語科の接続の分析を活かした中学校英語の高度化について

—主体的に学習に取り組む態度に焦点を当てて—

松本 志津子*・染谷 藤重**

(京都教育大学附属桃山中学校教諭*・京都教育大学**)

On Upgrading Secondary School English,
Utilizing the Analysis of Connections in the Elementary and Middle School English Departments
Focusing on the Development of a Positive Learning Attitude Education

Shizuko MATSUMOTO・Fujishige SOMEYA

2020年9月30日受理

抄録：小学校に外国語科が導入され、中学校では英語教育の高度化が急務となってきた。その解決のために、調査研究を行った。調査の参加者は、国立大学附属中学校の1年生112名であった。調査にはアンケートが用いられ、分析としては記述統計量及びt検定を用いた。また、生徒の自由記述を分析するためにKH Coder 3を用いてテキストマイニングを行った。その結果を考察し、中学校での指導を高度化するとはどういうことなのか、新しい学習指導要領の評価の観点の1つである「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当てて考えていくことを旨とする。

キーワード：小中連携、小学校英語、中学校英語高度化、主体的に学習に取り組む態度

I. はじめに

小学校で英語が導入され、中学校には英語の音声や表現に慣れ親しんだ児童が入学してきている。彼らが英語の音声を容易に聞き取ることや理解や使用できる語彙、表現の多いことに驚き、小学校での英語教育の効果を実感する一方、その能力には個人差や出身学校間の差が大きく、中学校で英語教育を高度化していくためには、一律にスタートすることの難しさもまた実感している。小学校で蓄積された体験的な英語表現を土台として学習を展開することが困難で、小学校の学習内容を再度学習する、もしくは中学校での授業の高度化を目指し定着していない学習内容を既習事項とみなし、発展的な内容に取り組み、生徒の意欲を損なうなどの、円滑な接続を図れていないケースも少なくない。また、中学校では、英語学習が、定期考査などで評価されることもあり、その位置づけに対する小学校英語との意識の差が生まれ、高校入学選抜試験のための教科としての性格が濃厚になっていく。そんな中、中学校は英語の授業の高度化に向けて、模索を継続し、2021年度には、新学習指導要領の実施に伴い、新しい評価の観点における指導が実施されていくことになる。

その実施が円滑に推進されることを目指し、中学1年生にアンケート調査を行い、小学校と中学校を比較して、生徒が英語の授業に対して抱いている意識を調査し、その結果から小学校と中学校の接続において成果と、課題を検証し、新しい評価の観点を踏まえて、中学校での英語の学習の高度化をどのように着手していけばいいのかを考え、述べていく。

Ⅱ. 小中連携の成果と課題

1. 小中連携

(1) 小学校英語導入の経緯

2020年度より、小学校では外国語活動が教科化され高学年では外国語科が本格的に導入された。平成23年度の新学習指導要領には、外国語教育の充実がポイントの1つにあげられ、今回の実施に至るまで、小学校への外国語科導入に向けて、準備がなされてきた。そもそも、外国語が小学校に導入された経緯として、グローバル化が著しく進む国際社会で、アジア各国で小学校への英語教育の導入が進んだこと、日本国内の中学生の英語活用能力が十分でないことが背景としてある。直山(2010)が、コミュニケーション能力の素地を基礎の前につけることで小学校での外国語活動が開始され、外国語科の導入へと繋がったと述べているように、中学校で英語学習を始める前段階として、コミュニケーション力を養う準備として小学校での外国語活動が導入されてきた。

小学校での外国語教育の導入に当たり、小学校と中学校の連携が急速に進んだ。大矢・古家(2017)は、小学校と中学校との連携も密になり、小中の授業参観や交流授業などの授業内容の研修が活発に行われるようになり、さらにカリキュラムの開発も行われてきたと述べているように、この小学校での英語科の導入に向け、小中連携が重要視され、小学校と中学校が共同で研修や研究を行える組織や関係が作り出され、校種間の連携が深められたことも大きな成果と言える。

(2) 小学校英語導入の成果

先述したとおり、小学校における外国語教育の推進のねらいとして、コミュニケーションの素地を身につけることがあり、小学校の外国語教育では、音声を中心にした指導に注力し、中学校に進んだ生徒は授業の中で英語を音声で理解できる語彙や表現が増え、さらに音声だけでなく、読み書きもできるようになりたいという意欲を促進している。

文部科学省が小学生、中学生、小学校教員、中学校教員に行った平成26年度の調査(文部科学省, 2014)によると、「平成23年度より、小学校高学年(5, 6年生)に外国語活動(週1コマ)を導入後、小学生の72.3%(71.7%)が「英語の授業が好き」、91.5%(91.5%)が「英語が使えるようになりたい」、中学1年生の8割以上が、小学校の外国語活動で行った「アルファベットを読むこと」や「英語で簡単な会話をすること」が「中学校で役立っている」と回答。小学校教員は、導入前と比べ、高学年児童に「成果や変容がみられた」と感じる教員が76.6%(76.5%)中学校教員は、導入前と比べ、中1の生徒に「成果や変容がみられた」と感じる教員が65.3%(77.8%)で、その変容として、外国語によるコミュニケーションへの積極的な関心・意欲・態度のみならず、英語を聞いたり話したりする力もついてきていると挙げている。(()内の数字は調査前年度のもの)」とあり、小学校での英語教育が中学校での学びに効果を及ぼしていることは明らかな成果と言えよう。

(3) 小学校英語導入後の課題

一方、小学校で外国語科が導入されたことにより、英語が分からない、または、つまらないという知識や情意面での差が開き、中学校英語をスタートさせる時にその差を埋めることが優先され、中学校英語の高度化を妨げる要因の1つになっている。伊藤(2016)は、生徒が小学校外国語の授業に対して中学校英語の「助けになっている」か否かを調査し「助けになっている」という気持ちにはばらつきがあり、生徒それぞれの学習の得手不得手もちろんだが、指導している内容や指導者の指導力が大きくかわっていることを述べている。さらに、特に外国語活動の中で扱われる英単語や英文が意味も分からないまま音を中心に押し付けられていて、そのことに対し不安を感じる児童も居り、音声を大切にしながらもどのような指導が児童への内容の理解を促せるか、と言うことは今後の大きな検討課題であるとも述べている。「あいまいさ」が残る小学校の外国語を、中学校では「正確さ」を求めたものに変えていき、オールイングリッシュで授業が展開される高等学校での英語教育に向けて、英語の技能を身につけることが必要になる。「中学校では、小学校でコミュニケーションの素地を養った子供がはいってきて、高校に入るまでに、英語で授業を受けることに耐えうる子どもをそだてて卒業させなければならない。」(直山, 2010, p.4)

とあるように、今後は、小中高の接続を視野に入れながら、実際の指導に当たっていく必要がある。

そのために、小中高の連携がとれた英語教育を見据えながら、各校種間の連携を推進し、互いに指導内容、指導方法、また教具などの共有化を図り、系統立った指導を展開していくことが望まれる。それに当たり、教育委員会や管理職のリーダーシップの下、研究・研修も行われているが、指導者の意識差があるのも現実で、小中連携を例に見ると、長沼ら（2012）は、小学校教員では目の前の具体的な課題の解決への優先度が高かったのに対して、中学校教員の方では連携への意識がより高いと記し、現段階では、小学校では、指導内容の明確化を求める声が多いのに対して、中学校では生徒の地域格差や学校格差の是正を求めているのが実態であるとしている。

（4）中学校英語の高度化について

このような小中高の連携を図った英語教育の必要性が叫ばれている中、中学校では高度化に向けて模索が続いている。文部科学省の調査委員会の報告(文部科学省, 2014)によると、身近な話題についての理解や簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養い、授業を英語で行うことを基本とし、内容に踏み込んだ言語活動を重視すること、小学校高学年の教科型導入を踏まえ、中学校ではより多くの英語に触れることにより、学習内容の着実な定着を図ること、コミュニケーションを円滑に図るために必要とされる基本的な文法事項については中学校で一通り活用できるようにすることと高度化について3点を述べ、円滑なやりとりができるためのコミュニケーション能力の育成、題材の内容を理解し、それについての意見を表現できるような言語活動、言いたいことを支えるための文法事項の定着が述べられている。小学校時代にコミュニケーションの素地を養っている生徒の強みとして、定型表現を使用できることが挙げられる。中学校では、小学校で体験的に蓄えられた定型表現を使用場面に応じて組み合わせ、円滑なやりとりによりまで発展できるような授業展開が望まれる。そのためには、小中を見通した教科書の分析を行い、どのような定型表現をどのような場面で学んでいるのかを知り、それを踏まえた指導内容の作成が必要である。長谷部・神谷（2014）は「挨拶」や「教室英語」をはじめとし、「自己紹介」や「職業」、「案内」や「買い物」など、多くの Basic Activities が児童用英語教材と中学校英語検定教科書で共通することを明らかにし、中学校用英語検定教科書で用いられている Advanced Activities には、児童用英語教材の Basic Activities を複雑にしたものと、児童用英語教材の Basic Activities を複合したものの2種類の活動があることを示した。さらに、中学校用英語検定教科書における Basic Activities で使用する「定型表現」の多くは、児童用英語教材の Basic Activities で使用する「定型表現」とこれらの「定型表現」を複雑にしたものであること、Advanced Activities で使用する「定型表現」の多くは、児童英語教材の複数の Basic Activities にまたがって使用可能な「定型表現」とそれらの表現を複雑化したものとなることを明らかにしている。中学校用検定教科書の活動が、小学校英語の Basic Activities を複雑にしたものか、複合したものかを考え、話題や内容について英語を使って言いたいと思えるような活動場面の設定を行い、中学校の英語活動の Advanced Activities の中で既習事項を活用しながら言いたいことが英語で表現ができるようにしていく必要がある。

さらに、このように学んだ表現を実際に使用するためには、場面を設定することが重要である。その実現に向けて、英語だけの教科ではなく、他教科、道徳や特別活動などと連携したカリキュラムを開発する視点も欠かせない。例えば、郷土について伝える活動を考える際には、英語の授業だけで扱うより、社会人講師、道徳、特別活動などの学校教育全体の中で、取り組むことで多面的に捉え内容が深化できると考える。青柳（2016）は、英語だけでなく、ほかの教科の年間学習指導計画が職員間で共有できる形になっていて、何年生のどの時期に、どの単元で郷土に関する内容を扱うかが見えることの必要性和、教科を超えて話し合いをもつ機会や仕組みを整えることで、「合教科」的な発想を取り入れることが望まれていることを述べており、学校の教育活動全体で取り組んでいくカリキュラムマネジメントが今後一層期待される。このような表現活動の場の設定により、生徒はコミュニケーションの楽しみを得、円滑にやりとりができた自信を持ち、学習への大きな動機付けにもなるだろう。さらに、表現を使う場面が実際にあることにより「学ぶ意義」も実感できると考える。このように、動機づけや学ぶ意義のある活動を促進する中で、学習には目的意識が生まれ、主体的に学ぶ姿勢が涵養されていくと考える。松尾ら（2013）は、動機づけは、生涯にわたって自律的な学習者になるために必要なものであるとし、短期的にテストの点数をあげるために必要とされるものではないと述べているように、今後の学習において、主体的に学習に取り組む態度の育成のため、動機が高められるような学習の機会を積むことが重要である。

Ⅲ. アンケート調査の結果と考察

2021 年度から中学校に新学習指導要領の本格実施を迎え、小学校英語が教科になり、評価を受けた生徒が中学校に入学し、さらに中学校での英語教育の小学校との円滑な接続かつ高度化が急務になると言える。この大きな転換期を迎え、生徒は小学校と中学校の英語の授業をどのように捉えているのだろうか。彼らの意識を分析することを通して、今後の英語教育で必要なものを検証するために行った。

1. 研究の内容と考察

(1) 目的

小中学生の英語に対する意識を比較分析し、それを踏まえ、小学校・中学校の英語教育を今後さらに発展させるための方向性を発見するためにアンケートを行った。

(2) 方法

英語の授業時間内に、教科担任に依頼して実施した。アンケート用紙を配布し、生徒氏名を記入の後、回答してもらい（任意回答）、教科担任より回収した。それを、執筆者が回収し、分析を行った。

(3) 手順・結果

アンケートの作成には、英語全般的なことに対する楽しさ、小学校の時のことを思い出してもらう項目、現在の英語学習に関する項目などに別れている。

アンケートの分析には、SPSS Ver.27 による記述統計量の算出・ t 検定、KH Coder によるテキストマイニングを用いた。

(4) 分析結果と考察

まず、「英語に関することについて」生徒の現状を把握するために、記述統計量を算出した（図1から3）。

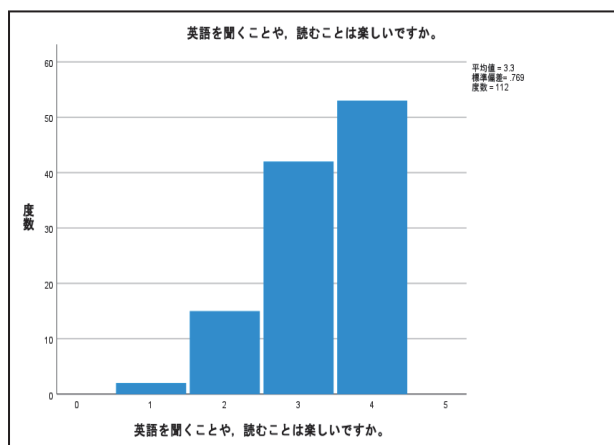


図1 英語受容に関するヒストグラム

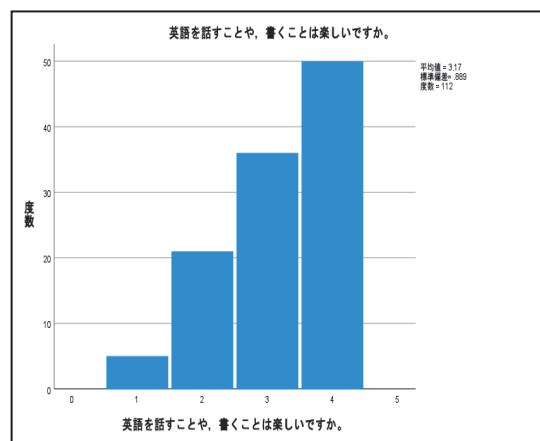


図2 英語算出に関するヒストグラム

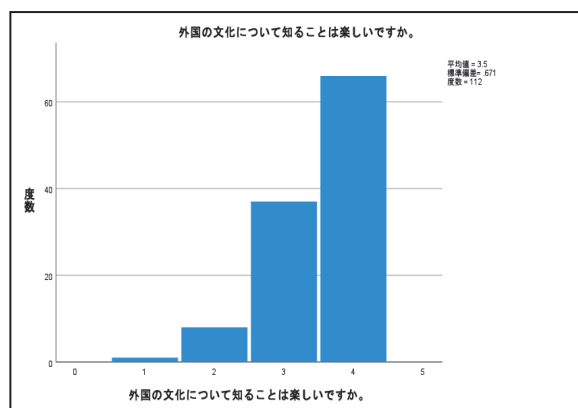


図3 外国の文化に関するヒストグラム

中学校入学後、半年が経過し、中学校の英語の授業に於いて、聞くことや読むことを楽しんでいる生徒が約9割、話すことや書くことは約8割、文化について知ることについては約9割が肯定的に捉えており、これは各技能において、小中の英語授業の接続が円滑に進み、中学校での英語の理解や表現ができるという気持ちで受けられていると考えられる。一方、わずかではあるが、話すこと、書くことに関しての意欲が少し低下することから、表現することに少し動機が下がり、発表などに関して思春期を迎え、恥ずかしいと思うような情意面の特性や、書くことが本格的に始まったことにより、書くことへの抵抗が大きいことも考えられる。

次に、小学校の時の4技能への理解度と中学校1年生時点での理解度を比較するために t 検定を行なった。その結果を表2,3に示す。

表1 アンケートの内容項目

Q1	英語を聞くことや、読むことは楽しいですか。
Q2	英語を話すことや、書くことは楽しいですか。
Q3	外国の文化について知ことは楽しいですか。
Q4	小学校の英語の授業で、英語を聞きとることができましたか。
Q5	小学校の英語の授業で、英語を進んで話すことができましたか。
Q6	小学校の英語の授業で、英語を読んでその意味を分かることができましたか。
Q7	小学校の英語の授業で、英語の単語や文を書き写すことができましたか。
Q8	小学校の時の、外国語（英語）の授業は楽しかったですか。
Q9	Q8の理由はなぜですか。具体的に書いてください。
Q10	中学校の英語の授業で、英語を聞き取ることができますか。
Q11	中学校の英語の授業で、英語を進んで話すことができますか。
Q12	中学校の英語の授業で、英語を読んで理解することができますか。
Q13	中学校の英語の授業で、英単語を書いたり、英文を自由に書くことができますか。
Q14	中学校の英語の授業は楽しいですか。
Q15	Q14の理由はなぜですか。具体的に答えてください。
Q16	小学校の時の英語よりも、中学校の英語の方が難しいですか。
Q17	Q16の理由は何ですか。
Q18	あなたは小学校の時、学校以外で英語を勉強していましたか。
Q19	「はい」の人はどこで学習をしていましたか。答えてください。（例：塾、英会話教室、インターネットを使った学習〈zoom やスカイプ他〉、家庭教師など）
Q20	あなたは、今、学校以外で英語を勉強していますか。
Q21	「はい」の人はどこで学習をしていますか。答えてください。（例：塾、英会話教室、インターネットを使った学習〈zoom やスカイプ他〉、家庭教師など）

表2 記述統計量

	<i>N</i>	小学校		中学校	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
聞くこと	112	3.31	0.87	3.31	0.70
話すこと	112	3.04	0.91	3.10	0.83
読むこと	112	3.32	0.82	3.33	0.69
書くこと	112	3.64	0.70	2.98	0.89

表3 t 検定の結果

	t 値	df	差の 95%CI	
			LO	HI
聞くこと	.000	111	-0.15	0.15
話すこと	-.680	111	-0.21	0.10
読むこと	-.130	111	-0.14	0.13
書くこと	7.326***	111	0.48	0.84

*** $p < .001$

t 検定の結果, 小学校の時の情意面と中学校での情意面では, 書くことのみに有意差が見られた ($d(111) = 7.326$, $p < .001$, $d = .692$)。

これは小学校では音声中心で行われてきた英語の授業が, 読み書きの技能も多く使われるようになり, さらに語彙や文法など書く必要性が高くなったことが要因の1つにあると考える。また, 定期考査や高校入学選抜試験という意識も芽生え, 正確に書けることが, 評価と直結すると考えるようになるのも1つの原因であると考え。

自由記述分析として, 小学校において英語が楽しいと回答した共起ネットワークを図4に, 中学校において英語が楽しいと回答した生徒の共起ネットワークを図5に示す。

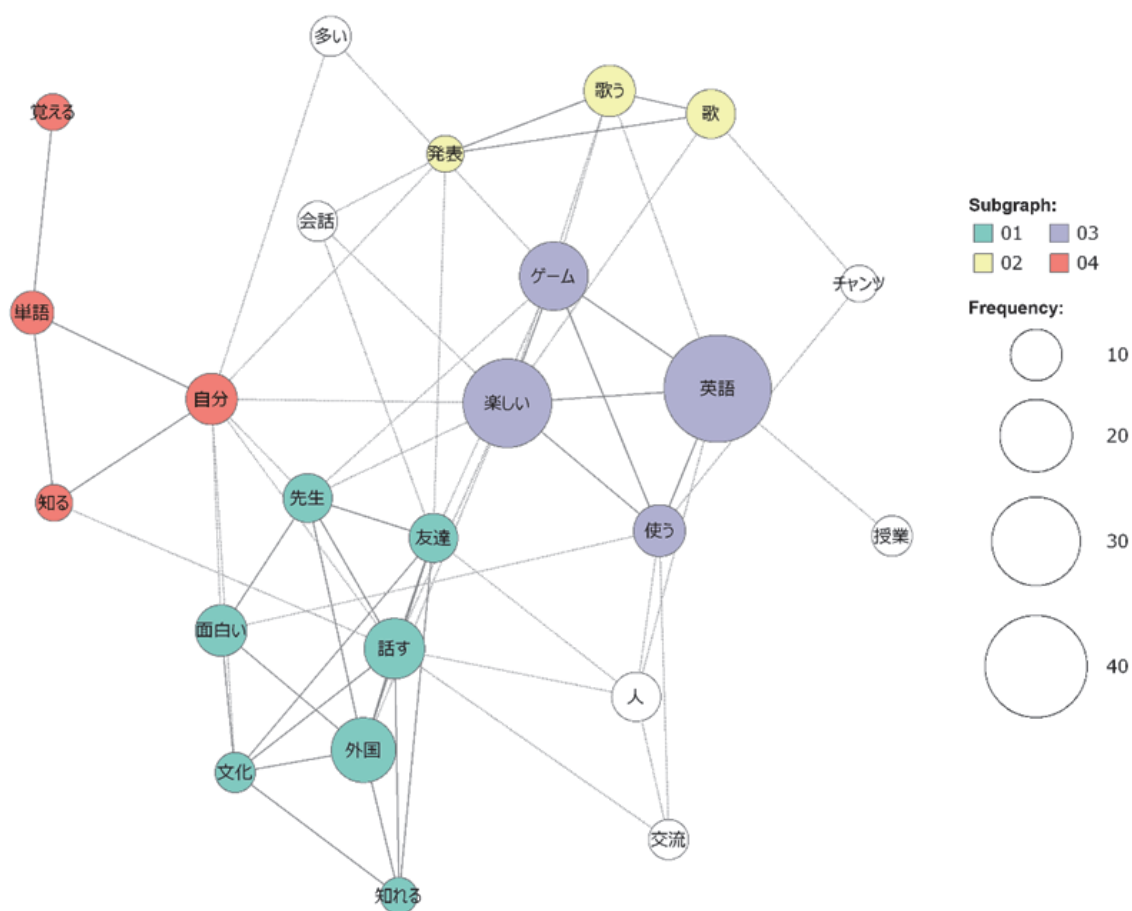


図4 小学校において英語が楽しいと回答した共起ネットワーク

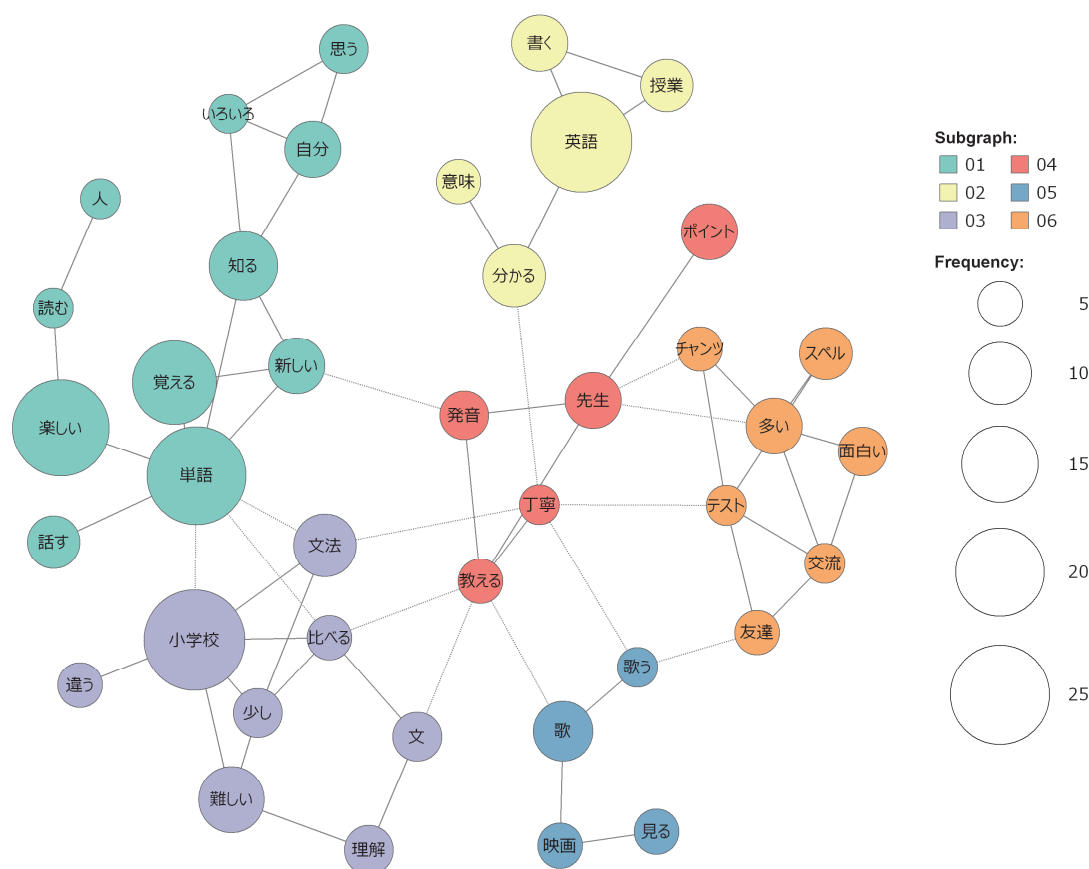


図5 中学校において英語が楽しいと回答した共起ネットワーク

この結果より、中学校において、英語が楽しいと思えるには、大きく4点に分類されると考える。音声を中心にした活動の継続、指導者の説明による明示的な指導、文法や語彙を覚え定着を図ることで規則や語彙が増え、表現の幅が広がり正確な文章が使えるようになること、そして、語彙、会話表現や文法など辞書を使い、自分で見つけ出して理解できたり、コミュニケーションに盛り込んで通じたりした実感があることに分けられると考える。この中で、中学生にとって、自分で主体的に学習を進めることが達成感につながり学習意欲を高めることが分かる。

IV. 今後の課題と展望

今回のアンケート結果より、小学校での音声中心で体験的な英語学習が、中学校での英語学習に効果を上げていることが明らかになった。小学校の時の英語学習が好きだと感じていた生徒は、中学校で新たに本格的に始まる書くことにも意欲的であるが、逆に小学校の時の英語学習に対して好感を抱けなかった生徒は、音声を綴りにし、文法を理解して英文を書くという量的な学習を要することへの耐性を獲得することが難しい。好きや嫌いには授業者の指導内容や技術が影響するのはもちろんだが、今回のアンケートの中で、小学校の時に、英語が好き

ではなかった理由として、音声だけの活動で、英語の規則を理解できず、模倣して発話するだけで、自分の言いたいことが表現できるようになった実感を持てず、意味ある学習になっていなかったという記述があった。さらに、評価の面でもテストがないことで自分の到達度が分からなかったり、動機付けがされなかったりすることも述べていた。

中学校では、文字を介することにより、小学校の時より、明示的な英語学習へと変わり、理解ができて楽しいと考える生徒が増え、入学当初は英語学習の文字から理解できることに対する喜びや理解のしやすさにより学習への意欲も高まる一方で、学習が進んでいくにつれ、次第に理解だけでなく、語彙や文法など覚えなければならぬことも多く、その量的な煩わしさに意欲も低下してくるのではと考えられる。さらに、語彙や表現を活用して、表現したいことを十分に書くことができる力は、授業中の学習だけでは獲得することが難しい。書くことが楽しいという生徒の中には、自分で新しい単語を見つけたり、書けたりすることが楽しいと書いている生徒が少なくなく、指導者から与えられた学習だけではなく、主体的に学ぶ態度が意欲といかに影響しているのかを見て取ることができる。

1. 今後の教育的示唆

日本の英語教育は、EFL(English as a Foreign Language)であり、生活の中で、英語を使用する場面は限られているので、インプットやアウトプットの機会は限定的で、英語は社会的要請というよりは、学習者の視野の拡大という教育的な性格の方が濃厚である。実際に話しことばとして使用されている現実が少なく、英語で場面を設定し、活動をし、疑似コミュニケーションになりがちである。よって、英語を実用化しようとする、学習環境や目的に無理が生じ、また、英語を教養とするには、グローバル化への対応のため、コミュニケーションを図る必要性に対応するという観点が盛り込まれない。岡(2020)は、外国語学習の目的を6つの項目に分け、さらにそれらを目標、価値、意義の3つに分類した。技術面での目標(外国語でかかれたものを読んで新しい情報を摂取する態度を養う・外国人と口頭あるいは文字を介してコミュニケーションできる)に加えて、文化的価値(偉大な文学にふれ個人的教養を広げる・外国人の生活やものの考え方に対する共感的な見方を身につける)、教育的意義(知的能力を伸ばす・言語の機能の理解を深め、母国語の理解をより深める)を融合させることが大切になる。換言すれば、英語の技能を伸ばすと同時に、英語学習を通してことばや文化への認識をたかめ、学習者の全人的な成長に貢献するものとならなければならないと述べており、英語を使って教養や人格を豊かにし、主体的に学習を推進するという非認知スキルを獲得していくことも学びの重要な意義として捉えられるということだと考える。

2. 新学習指導要領

文部科学省(2017, p. 19)の中で、中学校教育の基本と教育課程の役割として、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際、生徒の発達段階を考慮して、生徒の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮すること」とあり、主体的に学習に取り組む態度の育成をめざし、学校の教育活動と並行して、家庭での学習習慣の確立の重要性が述べられている。一方、日本の家庭学習時間の減少が著しく、2004年のOECDの調査によると、日本は先進国中最下位であった。これは日本の小中学生が学習目標を立て、課題を設定し、計画を立て実行し、評価改善していく力に課題があることが分かる。自律的学習習慣の未定着、すなわち自己調整学習能力の欠如が考えられる。学校の授業では、ポートフォリオなどの振り返りを用いることで、目標やそれに対する振り返りを行い、客観的に自分の学習の過程を見つめられるような実践を展開しているものも見られる。自己調整学習能力とはメタ認知、感情、行動の各面に、学習者自身が能動的に働きかけ、学習者としての自律性を高め、目標設定に向けて進んでいく相互性のある学習過程であると定義し、山本ら(2013)は、自分の意志で学習をコントロールし進める能力は、教師からの援助なしには身につかないとし、教師の能動的な関与を進めているという論を基に、自己調整学習能力を身に着けるための指導の必要性を説き、今後は、生徒が主体的に学習できるようにするため、指導者が理論を身につけ、指導技術や方

法を研究する必要性が高まるだろう。

主体的な学習を司るために、内発的な動機付けが十分満たされていることも重要で、自分の興味関心の拡充、学級内での協働的な人間関係、自己有能感などの自己決定理論の研究や実践の推進が教育実践に大きく寄与していくことと考える。

V. おわりに

小学校の英語の教科化の実施に当たり、授業やカリキュラムの作成に小学校で取り組まれた研究や実践は成果を上げ、それを引き継いで中学校でも学習内容の高度化が推進されようとしている。その高度化には、知識や技能、活用場面などの発展的な内容と共に、主体的に学習に取り組む態度の育成を援助していく意義が明らかになった。その指導や援助は、非認知スキルであり、個別の対応による点、また家庭での学習という実際対面で行えないことを必要としていることより、明確にどのような実践が適切な指導に当たるのかを明言することが難しい。しかし、主体的に学習に取り組む態度を獲得することができたなら、生涯の学び続けることができる人間の育成に携われたことになり、予測困難な現代の生き抜く子どもたちのために、様々な課題を克服する力を身に着け、言わば、未来を切りひらくことができる人材を育成できたことと言えるだろう。そのために、今後も理論と実践を往還させながら、主体的に学習に取り組む態度をキーワードとして捉え、中学校英語の高度化を推進していきたい。

VI. 参考文献

- 青柳敦子 (2016). 「小中校連携した英語教育の取組とその展望—山形県「小中高大連携プログラム」をもとに—」『山形大学教職 教育実践研究』11, 1-9.
- 伊藤摂子 (2016). 「小中連携を考慮した小学校外国語活動～中学校への意識調査を通して～」『東洋大学文学部紀要 第70集教育学科編』XLII, 11-22.
- 及川賢 (2015). 「英語学習への意識の変化に関わる要因—小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いとの関係—」『埼玉大学紀要 教育学部』64(2), 199-212.
- 岡秀夫 (2020). 『新学習指導要領に対応した英語科教育法 新・グローバル時代の英語教育』東京：成美堂.
- 大矢裕子・古家貴雄 (2017). 「附属学校における英語教育の小中連携の試み—中学生と小学生の合同英語授業の実践の成果と課題—」『山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』22, 157-168.
- 直山木綿子 (2010). 「円滑な小学校外国語活動導入にむけて」—小・中連携と評価の課題を考える—平成22年度鳴門教育大学小学校英語教育センターシンポジウム基調講演『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』創刊号, 1-6.
- 長沼君主・小泉仁 (2012). 「小中連携における小学校英語活動に関する小中教員意識差」*ARCLE REVIEW*, 6, 22-32.
- 長谷部郁子・神谷昇 (2014). 「中学校英語活動につなげる小学校英語活動—有機的な小中連携に向けて—」『小学校英語教育学会誌』14(1), 163-178.
- 松尾砂織・小廣川和恵・安松洋佳・檜葉みつ子・柳瀬陽介・松宮奈賀子 (2013). 「新学習指導要領の下での授業実践—小中連携を意識した学習指導について (1)」『広島大学学部 附属学校協働研究機構研究紀要』41, 219-228.
- 文部科学省 (2014). 「資料 3-2 外国語活動の現状・成果・課題」『英語教育の在り方に関する有識者会議 (第3回) 配付資料』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/05/01/1347

389_01.pdf (2020年9月18日検索)

文部科学省 (2014). 「英語教育の在り方に関する有識者会議 (第5回) 配付資料 【資料2-1】 中学校・高等学校における英語教育の在り方に関する論点」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/attach/1352317.htm (2020年9月18日検索)

文部科学省 (2017). 「中学校学習指導要領解説 (平成29年告示) 総則」 東京: 開隆堂.

山本玲子・斎藤榮二・近藤睦美・石川保茂 (2013). 「小学校外国語活動と中学校英語科教育の連携による自己調整学習能力育成の実証的研究」『京都外国語大学国際言語平和研究所研究論叢』81, 69-80.